

音楽表現の楽しさを実感できる授業とは

－第1学年 「東雲小のあそび歌」の実践を通して－

福田 秀 範

1 はじめに

これまでに「楽しさ」の実感と「感動」の共有をキーワードに授業づくりを行ってきた。新学習指導要領の目標において音楽表現に対する「楽しさ」の実感は、低学年では「音楽表現の楽しさに気づく」中学年では「音楽表現の楽しさを感じ取る」高学年では「音楽表現の喜びを味わう」という言葉で系統的に示されている。では、この「楽しさ」とは何なのか。また、この「楽しさ」を実感するとは子どもたちのどういった姿をいうのであろうか。今回は、この2点について「つくって表現」の授業を通して考えていきたい。

2 「楽しさ」の実感をどうとらえるか

楽しさの実感は、子どもと音楽との相互作用の中から生じ、次のような過程での作用を子どもが意識したときである、と小島律子（大阪教育大学）は述べている¹⁾。①音楽に出会い、自分の感覚や思考が引き出され、②音楽とのかかわりの中で感覚や思考を発揮することができ、③その感覚や思考が新しいものに作り替えられていく過程。そして、子どもと音楽の相互作用は、次の2つの方向性をとると示している。①自己の内面に深まっていく方向。これは音を組み立てていくことが自分の生活体験や生活感情を発掘し、表現していくことになり、そのことを通して自分を見つめ直し、自分の内面に対する意識を深めていくことになるということである（深化）。②他者との関わりや広がりを求めていく方向。これは例えば、自分の音に友達の音を重ねると和音の響きが生まれ、作品に秩序や変化を与え、形式へと発展するというようなことである（広がり）。

ここでは、音楽科と生活科の関連を図った授業実践における子どもと音楽の相互作用の中で生じた楽しさの実感を見ていく。そして、この楽しさがどのような深化と広がりの方方向性を示したかを考えていきたい。

3 実践の概要 「東雲小のあそび歌」～ようこそ東雲小学校へ～（第1学年）

＜生活科との関連を図った実践＞

(1) 題材について

遊び歌には、歌いながら楽しさを味わえるよさがある。また、遊びを通して、人と人との自然なかかわりを広げられるよさもある。本題材では、このような遊び歌のよさに加え、本学級の子どもたちの体験を歌詞に盛り込み「東雲小のあそび歌」を子どもたちと教師がアイデアを出し合って創作する。それをいろいろな人々に紹介し、歌詞に込めた気持ちを生かしながら、表情豊かに歌ったり、体を動かしたりして楽しく遊ぶことをねらいとしている。「東雲小のあそび歌」の歌詞づくりには、生活科の「学校探検」「猿猴川探検隊」「芋掘り」など校外で子どもたちが直接体験した出来事や思いを盛り込み、歌い方や遊び方、体の動かし方などの工夫に興味・関心を広げていく。

本学級の児童は、これまでに「ひらいたひらいた」「けんけんぱ」「かもつれっしゃ」などの遊び歌を学習し、歌に合わせて遊ぶ活動を楽しんできた。また生活科でも、参観日を利用して、いろいろな昔の遊びを親子で体験し、「かごめかごめ」「通りゃんせ」といったわらべ歌遊びを楽しんでいる。子どもたちは、これらの遊び歌に合わせて、手をつないだ

り、歌ったりすることで、4月に初めて出会った友だちともかかわりを深めたり、様々な人々とのかかわりを広げてきた。本題材を通して、さらに人とかかわることの心地よさを感じとり、自ら進んでかかわりを広げる意欲をもてるようにしていきたい。

(2) 指導目標

- 1 自分たちの遊び歌を工夫して作ったり、友だちやいろいろな人々といっしょに歌ったり遊んだりする楽しさを味わうことができるようにする。
- 2 歌詞の気持ちを生かして、歌い方や体の動きを工夫し、楽しく歌ったり遊んだりできるようにする。

(3) 指導内容と計画……………7時間

- 第一次 いろいろなあそびうたがあるんだね……………1時間
第二次 つくってみようー東雲小のあそび歌ー……………2時間
第三次 どんなあそびにしようかな……………3時間
第四次 東雲小のあそび歌ーよろこ東雲小学校へー……………1時間

(4) 学習活動の実際

【第一次 いろいろなあそびうたがあるんだね】

活動のねらい：いろいろなあそび歌を想起しながら楽しんで歌って遊ぶことができる。

この場面は、これまでに休憩時間や学習の場面で、自分たちが何となく歌って遊んでいる歌を再認識する場である。生活科の時間に、親子で「かごめかごめ」や「通りゃんせ」を歌いながら遊んだ経験や、体育の時間、長縄で「ゆうびんやさん」を歌って跳んだ経験。もちろん、音楽の時間に、「ひらいたひらいた」や「かもつれっ車」をして歌って遊んだ経験もここに含まれている。

いろいろ遊びのことを思い出していくうちに、遊びたいという子どもたちの欲求が高まってきた。そこから歌って遊ぶ活動が始まった。「かごめかごめ」や「通りゃんせ」は、生活科の時間に遊んだ子どもがクラスの一部だったので、まずは、その子どもたちにやって見せてもらった。しかし、遊びは覚えているものの、歌が曖昧で遊びを楽しむところまで行かなかった。そこで、この2曲は教師のオルガンで旋律の音を確認しながら、全体で歌った。「こんな歌だったのか。やっとわかった。」遊びの時の口伝えで、何となく歌っていたが、実はよくわかっていなかったことが、すっきりした子どもの発言である。

【第二次 つくってみようー東雲小のあそび歌ー】

活動のねらい：自分たちの体験を生かし、みんなで楽しく歌って遊べる歌を工夫してつくることができる。

1年生の子どもたちにとって、歌をつくるというのは、今回が初めての経験である。まずは、教師の制作による作品を紹介した。子どもたちのよく知っている「かごめかごめ」の旋律に、生活科「えんこう川たんけんたい」での体験を盛り込んで創作したものや「ひらいたひらいた」の旋律に、朝顔やさつまいもを育てた体験を盛り込んで創作したものである。歌詞カードを配られ、「えんこう川」「いもばたけ」という見慣れた言葉があり、「なんだろう。」と好奇心で子どもたちは見ていた。そのうち「かごめかごめ えんこう川」という題を見たある子が「これって、歌？」と気づきを発表した。「そう。この歌はみんながよく知っている歌です。でも、言葉が少し変わっているよ。」

旋律はよく知っているので、歌詞の言葉をよく見ながら、みんなすぐに歌えた。歌い始めから、思わず吹き出す子どもがいて、みんなの表情もゆるんだ。

全部の歌を一通り歌い終わったところで感想を聞いた。すると、もっと～した方がいい、というたくさん意見が出た。「通りゃんせ」を例にとってみる。

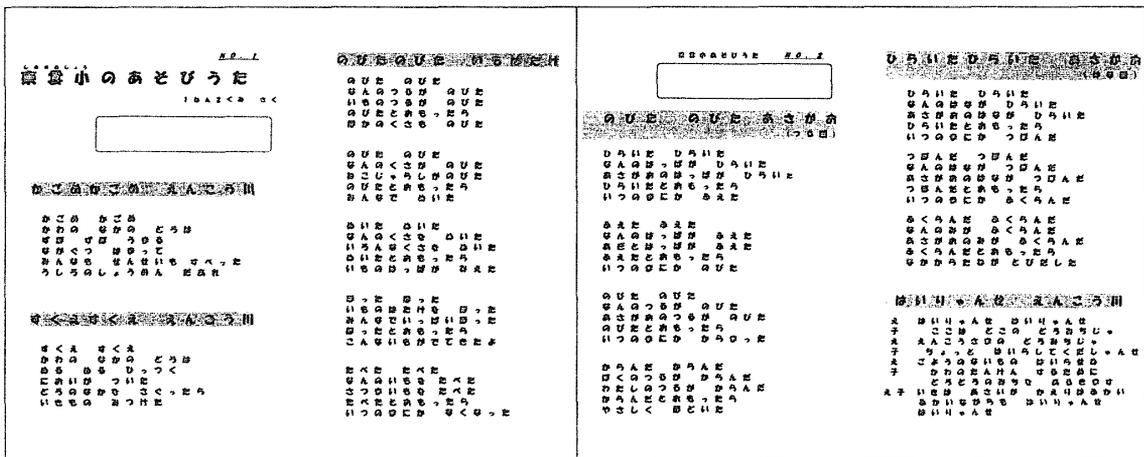
『通りゃんせ』という題が合わないと思います。えんこう川には、みんなで入ったので『はいりゃんせ』がいいと思います。」

「それなら、『ちょっと通して』も『ちょっと入らせて』の方がいいと思います。」

「『行きはよいよい帰りはこわい』のところ、えんこう川では、水が最初は浅かったのに、だんだん深くなったので、『行きは浅いが 帰りは深い』の方がいいと思います。」

「ここはどこの『ほそみちじゃ』よりも『どろみちじゃ』の方が合うと思います。」

このような話し合いが、どの曲にもあり、私が提示した原曲は、子どもたちの実体験から生まれた言葉に置き換えられ、子どもたちによる創作になっていった。



【第三次 どんなあそびにしようかな】

活動のねらい：歌詞の気持ちを生かし、歌い方や体の動きを工夫することができる。

本実践は本校の研究会に合わせて行った。人とのかかわりを生かすよい機会と考えたのである。活動の見通しとして、全国から来られる先生方に、東雲小学校での自分たちのくらしをみんなのつくったあそび歌で紹介しようというめあてを提示した。最初の1時間は「東雲小のあそび歌」の中で、自分が紹介したい曲を1つ選び、曲ごとにグループをつくった。その後は、グループごとでどのような形で紹介するかを話し合っていた。

「かごめかごめ えんこう川」グループは、まずは普通の「かごめかごめ」と同じ遊び方で練習をはじめた。「後ろの正面だあれ」のときに、当たったときにどうすればいいかで課題が生じた。その時に出した結論が「えんこう川で聞こえた音を口でマネをする」ということだった。「ピチョ」という泥の音や「ピチピチ」という魚の音などを口で表現することで自分たちの行ったえんこう川の紹介ができると考えたのである。

「すくえすくえ えんこう川」グループは、歌詞をさらに自分たちの体験に合わせたものにしていきたいと考えた。歌詞が完成したら、次にどんな遊びにするかを工夫した。そして、歌詞の言葉に合わせた身体表現をつくっていった。この動きでえんこう川での体験を紹介できると考えたのである。最後の「いきものみつけた」のところでは、遊びも入れたいということで、歌の最後に「じゃんけん」をすることに決めた。

「はいりゃんせ」グループは、「通りゃんせ」の遊びをそのまま生かして、歌って遊んでみることから始まった。原曲のように、子どもの役とえんこう様の役に分担し、歌って遊んでみた。歌詞そのものにえんこう川での様子がしっかりと盛り込まれているし、遊びも「通りゃんせ」の楽しさがそのまま味わえるため、歌詞のみ替わった「通りゃんせ」で終わりそうな雰囲気だった。そこで「泥道」や「行きは浅いが帰りは深い」という歌詞がもっと体の動きで表せないかを教師が提案した。普通にくるくる歩いて歌っていたことを例に

出し、「泥道はどうやって歩いたの。」「浅かった水がだんだん増えた様子は、どうやったら初めて歌を聴く人に伝わるだろう。」と言葉かけを行ったのである。そこから、子どもたちは一步一步泥にはまるようなゆっくりした歩き方を考え、えんこう役の2人のつないだ手を上にしてみんながくぐるという通常の動きを工夫しはじめた。そしてえんこう役の2人のつないだ手を地面に着くぐらい下げて、そこをみんながまたぎ、「帰りは深い」の歌詞辺りで、えんこうの2人が手を組んだままゆっくり立ち上がり、最後にその間にはまった子どもが次のえんこう役になるという遊びが完成したのである。

【第四次 東雲小のあそび歌—ようこそ東雲小学校へ—】

活動のねらい：「東雲小の遊び歌」を紹介して、友だちやいろいろな人々といっしょに楽しく歌ったり遊んだりすることができる。

研究会当日。自分たちの創作した遊びや身体表現を盛り込んだ「東雲小のあそび歌」を初めて本校を訪れる先生方と一緒に活動することを通して、東雲小学校のことを伝える活動の本番である。音楽室だけではとても活動できないので、校庭も利用して行った。

授業の開始前、子どもたちも参観の先生方も表情は硬かった。授業が始まり、導入であいさつがわりの歌を発表してから、子どもたちの雰囲気は和み、先生方からもあたたかい拍手をいただいた。互いの緊張が解れたところで、本時の中心の学習活動に移った。

「のびたのびた いもばたけ」は、この日が本番だったが、歌詞はさらに増え続けていた。始めは「芋のつるを植えて、それがのびて雑草も生えた。草抜きをして、芋掘りをした」という自分たちの体験を歌詞にしていた。そこに「掘った芋をみんなで食べたらおいしくて、あっという間に皿が空になった」というエピソードまでも、歌詞に盛り込み、6番までの歌になっていた。芋のつる役、雑草役、草抜き役、芋掘り役、掘った芋を食べる役、とみんなで役を決め、動きを創作していた。初めてこれを見る先生方は、いっしょに遊ぶというより、表現を見るのを楽しんでいる様子だった。先生方から「今のところは何をしているところ？」という質問を受け、「いろんな草を抜くところです。」「じゃあ、もう少し草が抜けるときがはっきりするといいね。」とアドバイスを受ける一コマも見られた。初めて出会った先生に、自分たちからかかわりをもとめていくことで、あそび歌をさらに楽しくしていくきっかけを得たことを子どもたちはとても喜んでいて。



それぞれの活動の後、音楽室に集合し、お互いの「あそび歌」を見せ合った。歌ができるところまではみんなで考えたのでよく知っていた。しかし、歌のグループごとになってからは、そこからどんな工夫が加わり、遊びや身体表現がついたのか、というのはいっしょに知らなかった。実際に遊んでからの発表だったので、子どもたちも「こうやって、さっきまでみんなで歌って遊んでいたよ」ということをとてもリラックスした状態で表現していた。「ピチャピチャとか、えんこう川で聞こえた音を口で言って、鬼がだれかを当てるといって遊び方がおもしろい」「いもほりが劇みたいになっていて、おどろいた。」「『通りゃんせ』はトンネルをくぐるけど、『はいりゃんせ』は、上からまたいで通るのが楽しそう。」など、楽しいという感想がたくさん聞かれた。

4 成果と課題

本題材での「楽しさ」の実感が、どのような姿で表れたかを次の3つの観点から成果と

課題を挙げてみたい。

- ①音楽に出会い、自分の感覚や思考が引き出される姿
- ②音楽とのかかわりの中で感覚や思考を発揮する姿
- ③感覚や思考が新しいものに作り替えられていく姿。

(①について) 私が制作した「東雲小のあそび歌」に出会った子どもの反応は、一人一人の子どもの体験が異なる分、様々な感覚や思考を引き出せたと考える。それは、『はいりゃんせ』の歌詞では「細道」が「泥道」に、「行きはよいよい帰りは怖い」が「行きは浅いが帰りは深い」という言葉に子どもたちが「その方がいいねえ。」とみんなで納得し合いながら歌を自分たちなりにつくり変えていく姿からの分析である。始めに歌ったときよりも、自分たちで体験を思い出しながらつくった歌を歌う方が生き生きと歌っていた。これが「楽しさ」を実感したときの歌声ではないかと考える。

(②について) この歌を、どのような遊びの要素を加えて、いろいろな人に紹介していくかを考える段階で、子どもたちは自分なりの感覚や思考を試しながら歌ったり、体を動かしたりしていた。「ひらいたひらいた」のような身体表現にしようか。「通りゃんせ」や「かごめかごめ」の遊びをそのまま残して、歌だけを替えようか。しかし、そのままの遊びでは、うまくいかないところが生じてきた。例えば「かごめかごめ」とくるくる回って歩いているが、歌詞の「ずぼずぼうまる」とどうも合わないという感覚を子どもたちが持ち始めた。そこで、もっとゆっくり回ってみたらというアイデアが出て試してみる。ただゆっくり歩くだけはまだ実際の感じが出ない。歌い方も、本当に泥に埋まったときの気持ちで、言葉一つ一つを力を入れて、力を込めて歌ったらいい、というさらなる改善案が出る。このように、自分の直接体験で得た感覚や思考を、自分たちの音楽づくりに発揮し、それが自分たちの思うような表現に近づけたとき、それは一人の喜びではなく、表現するみんなの喜びとなっていた。自分たちで表現方法を工夫して、納得のいく表現をつくっていく姿に「楽しさ」を実感している子どもの姿があったと考える。

(③について) 感覚や思考が新しく作り替えられるとは、本題材ではどの部分であろうか。これまでは、CDで聴いたり、楽譜にある歌を歌ったりしてきて、その歌のもつリズムやメロディー、歌詞などの要素に楽しさを感じて表現活動をしてきた。今回の授業は、子どもたちにとって初めての歌の創作活動であった。替え歌という要素は強かったが、歌詞を工夫していく中で、同じメロディーでも歌詞の違いで、歌い方をずいぶん工夫する必要があることを子どもたちは学習した。このことを生かし、今後歌詞の言葉や曲の気分を考えて、自分の感覚や思考を生かした表現ができることに、音楽表現の楽しさを実感できる子どもを育てていきたい。

5 おわりに

「楽しさ」とは何なのか。例えば、初めてリコーダーを手にした子ども。子どもが思いのままに音を鳴らす姿は楽しそうである。しかし、これはまだ「楽しさ」のほんの入口で、本当の楽しさの実感とは言い難い。リコーダーの演奏方法がわかり、何より自分の思う音が出せたときに(曲が演奏できたときに)さらなる「楽しさ」を実感できるであろう。音色の美しさの認識や演奏技能が高まれば、さらにちがった「楽しさ」を実感できるであろう。つまり、楽しさには段階があるということである。音とのかかわり、曲とのかかわり、人とかかわり等、様々なことが関連しているとおもわれるので整理し、研究を深めていきたい。

<引用文献>

- 1) 小島律子、「音楽の授業における楽しさとは」、日本学校音楽教育研究会紀要、『学校音楽教育研究』, 1997, pp 11-14